

外国語科における小中連携の在り方に関する研究

外国語科研究会議

研究員 豊竹 美喜子 (川崎市立荻宿小学校) 佐藤 良平 (川崎市立平間中学校)
 蕨口 穂高 (川崎市立子母口小学校) 梅澤 有美子 (川崎市立東橋中学校)
指導主事 鬼頭 洋司 齋藤 宗則

I 主題設定の理由

平成 29 年告示小学校学習指導要領において、高学年では教科として年間 70 時間の外国語科、中学年では年間 35 時間の外国語活動となり、外国語教育の時数が大幅に増え、充実が求められる小学校において、「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力 (外国語活動)」「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力 (外国語科)」を育成し、さらに中学校において、「コミュニケーションを図る資質・能力」を育成することが目指され、小学校・中学校が連携し、一貫した外国語教育の在り方が求められることとなった。しかし、令和元年度英語教育実施状況調査によれば、外国語教育において、カリキュラムにおいて連携を実施している学校は全国で 17.7%に留まっている。また、小学校での外国語の学習を接続する中学校 1 年では、小学校の学びを中学校に円滑に接続するため、従来とは異なった導入期の学習の工夫が必要となってくる。しかし、多くの学校において従来と変わらない指導方法が続けられており、小学校における学習内容や指導方法等を中学校で発展的に生かしていないことが指摘されている。このように、外国語教育において小中連携は課題となっている。

本研究では、外国語科における小中連携を推進するために、小中連携に関する教員の意識を明らかにし、小学校 6 年、中学校 1 年の接続部分における授業の在り方について研究するとともに、各学校において、小中連携推進の具体的な手立てを明らかにしようと考え、本研究主題を設定した。

II 研究の内容

1 外国語教育における実態調査と現状分析

中学校の英語科教員が、小学校外国語教育をどの程度理解しているのかを把握するために、小学校外国語教育に関する意識調査 (表 1) を行い、その分析を行った。

表 1 小学校外国語教育に関する意識調査 (対象：中学校英語科教員 外国語科研究会議作成) (%)

質問項目	はい	いいえ
1 小学校では、アルファベット・英文の書き写しのみを行っていることを知っていますか。	81.8	18.2
2 小学校では、文法の指導は行っていないことを知っていますか。	72.7	27.3
3 小学校では、スピーチや発表などの活動を行っていることを知っていますか。	90.9	9.1
4 小学校では、子ども同士でのやり取りの活動を行っていることを知っていますか。	90.9	9.1
5 小学校では、文法や発音に関しては、評価は行わないことを知っていますか。	54.5	45.5
6 小学校での活動内容を生かして、授業の活動を計画されたことがありますか。	36.4	63.6
7 小学校外国語の教科化がスタートしたことで、中学校入門期の活動内容を変更しましたか。	63.4	36.4

1 から 4 の質問では、どれも 70%以上が「はい」と答え、小学校外国語教育に対して一定の理解が進んでいることが分かる。5 は学習評価についての質問だが、「はい」と答えた教員は 55%に留まっ

ており、学習評価については理解が十分ではないことも明らかになった。また、6、7の小学校の活動を意識した授業を行っている教員は40%以下に留まり、実際に行った授業も「小学校の教科書の絵を使った」「疑問詞を使ったアクティビティを行った」といった回答があり、学習内容面についての連携という点で不十分であることも明らかになった。このことから、小学校でどのような外国語教育が行われているかが分かっているにもかかわらず、中学校において、小学校で学んできたことを生かす授業はまだ行えていないことが分かる。さらに、別の調査項目では、小学校の英語の授業で身に付けてきてほしい力について、「ある程度のライティング」「ローマ字を使えるように」と言った学習指導要領の指導内容から外れた回答が上がっており、実際に小学校で学習する内容が何かが中学校英語科教員に浸透していないことが明らかになった。

2 研究の方法

意識調査により実態を明らかにした上で、研究主題に基づき、次の4つの手立てを行った。

(1) 手立て① 中学校1年において小学校の学びをつなげる指導の工夫

中学校1年は、小学校の学びを受け、発展させていく重要な学年である。特に入門期においては、従来とは異なる指導の工夫が必要とされている。中学校1年における指導の工夫について研究した。

(2) 手立て② 小学校6年において中学校への接続を意識した指導の工夫

小学校6年は、小学校での学びを中学校につなぐ重要な学年であり、中学校の授業を視野に入れて、授業を行う必要がある。小学校6年における指導の工夫について研究した。

(3) 手立て③ 言語活動を意識した単元構成の工夫

小学校と中学校の外国語教育をつなぐ手立てとして、言語活動に着目した。外国語教育の目標は、小中学校共に「言語活動を通して」実現することが求められており、言語活動の共通となる部分を把握し、それを中心に単元を構成することがカリキュラムの連携につながると考えた。本研究では、小・中学校において、小中連携に資する言語活動の在り方について研究した。

(4) 手立て④ 川崎市版 CAN·DO リストの活用

平成26年度から中・高等学校では、各学校において、各学年の学習到達目標である CAN·DO リストの整備が進められてきた。現在、外国語の教科化を受け、小学校でも CAN·DO リストの整備が進められている。本研究では、この CAN·DO リストに着目し、小中連携推進の手立てとして、小学校3年から中学校3年まで各学年において育成すべき資質・能力を明らかにし、小・中学校の学習内容のつながりを意識できるような CAN·DO リストを作成し、その効果的な活用方法を研究した。

3 研究の実際

(1) 中学校1年生における小中接続を意識した授業

助動詞の can については、小学校5年で扱っており、自分や身近な人のできることやできないことを紹介する活動を行っている。以前は、can は中学校で扱っていた言語材料であり、1学年の後半に扱うことが多かった。しかし、小学校外国語科で can を扱うことから、中学校入学直後から can を扱うことができるようになった。そこで検証授業では、手立て①について、中学校1年接続期において小学校で学習した表現を用いて言語活動を行い、その効果について検証した。

実際に遠足で訪れ、体験した活動を“You can…”の表現を用いて ALT に勧めるという場面設定で言語活動を行った。ただ、自分の体験したことを“You can…”を用いて伝えるだけでなく、ALT の年齢や人柄を考えて何を伝えるべきか内容を思考するようにした。例えば、中学生が自分のし

たことを表現することが目的であれば“*We enjoyed a slider.*”と表現すればよいが、年の離れた ALT に対しては内容的に適切ではない。自分自身が楽しんだかどうかに関わらず、「ALT に〇〇を勧める」という目的を意識して、“*You can enjoy cooking.*”などと伝えることを促した。

図1 学習の流れ 令和3年6月16日実施 全9時間中9時間目
Unit 2 “Club Activities”

■単元目標 遠足で訪れた、おすすめポイントを紹介しよう。

	学習の内容
導入	・スモールトーク（生徒同士の会話）
展開	・教科書で学習した表現を確認する。 ・遠足で自分が体験したことを英語で話す練習をする。 ・自分が遠足でしたことを英語で書く。 ・ALT が興味をもつような内容を考え、文を再構築する。
まとめ	・作成した英文を ALT に発表する。

それを基に接続期である中学校1年の授業で生かす指導を行うことは有効であった。

（2）小学校6年生における小中接続を意識した授業

図2 学習の流れ 令和3年11月5日実施 全6時間
+短時間 15分×4

Unit 6 “Let’s think about our food.”

単元目標 食材を通じた世界のつながりや食べ物の栄養素などについて、短い話を聞いてその概要が分かり、伝え合うことができる。

	学習の内容
導入	・食べたものやそれらの産地についてのやり取りのおおよその内容を理解する。
展開	・食べ物とその産地についてやり取りをする。 ・食べ物ごとの栄養素のグループに入るのかやり取りをする。 ・「オリジナルカレーメモ」を作って、やり取りをする。
まとめ	・「オリジナルカレー」について発表する。

いる。小中連携の視点では、そのような中学校での言語活動を見据え、表現を指定した定型的なやり取りだけではなく、目的・場面を明確にし、児童が伝える内容をより思考するような言語活動を行うことが重要であると考えた。そこで、検証授業では、手立て②について、接続期の小学校6年で、定型的なやり取りではなく、スピーチの内容や構成も思考するような中学校を見据えた言語活動を行い、その効果を検証した。

Unit 6 “Let’s think about our food.”において、単元のゴールとして「夢のオリジナルカレーを紹介しよう」とし、発表をした後に学級内でオリジナルカレーコンテストを行うようにした。単元の後半には、書き溜めたものや慣れ親しんだ表現や語彙を生かして、スピーチメモを作成した。付箋を使って、話す構成を考えてから、文章を書くようにした。自分の考えたオリジナルカレーの良さが発表を通して友達にしっかりと伝わるように思考し、順番や構成を工夫する時間を設けた。ペアでお互いに改善点や良い点を話し合い、よりカレーの良さが伝わるスピーチの内容にするために繰り返し思考・整理する姿が見られ、小学校6年生においても、スピーチ内容や構成を思考するような中学校を視野に入れた言語活動は有効であった。

can については、小学校で5年から繰り返し学習しているため、生徒にとっても使い慣れた表現となっている。今回の授業では、can を使いつつ、伝える内容を思考する言語活動を行った。言語活動では、can を用いて自分の体験を基に積極的に ALT に自分の考えを伝える姿が見られ、中学校において小学校で行った学習した表現や言語活動を把握し、そ

小学校6年までに、児童は多くの語彙や表現を学んでおり、それらを用いて、自分のことや身近なことを伝え合うことができる。しかし、小学校外国語科においては、伝える内容を思考する場面は限定されており、使用する表現が指定された定型的な言語活動が行われることが多い。一方、中学校外国語科では、使用する表現が指定されずに、伝える内容を生徒自らが思考する言語活動が行われて

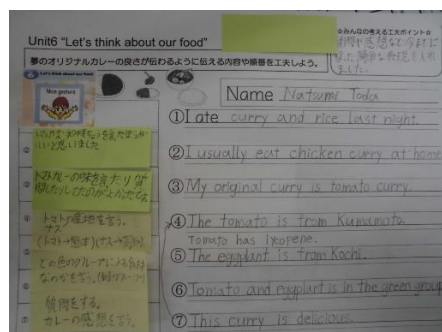


図3 児童のスピーチメモ

(3) 言語活動によるつながり

小中連携の取組は、中学校の教員が小学校の授業を参観したり、カリキュラムを持ち寄ってつながりを考えたりすることが行われてきた。本研究では、連携を深めるための方法として言語活動に着目した。図4のように小学校中学年の外国語活動から中学校の外国語科まで、「言語活動を通して」資質・能力を育成することが学習指導要領の目標に示されている。言語活動とは「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」である。児童生徒が自分の気持ちや考えを伝え合うためには、指導者が目的や場面、状況を明確にしたり、工夫したりして設定することが重要である。小学校の「身近で簡単な事柄」から始まり、中学校では「日常的な話題や社会的な話題」と少しずつ扱う話題を広げていく。しかし、言語活動を中心にして授業を構成するという点では共通であり、そのようにすることで小中連携が推進できると考えた。小学校4年外国語活動や中学校3年外国語科の授業において検証を行った。

外国語科の目標	
中学校	=コミュニケーションを図る資質能力
高学年	=コミュニケーションを図る基礎となる資質能力
中学年	=コミュニケーションを図る素地となる資質能力を育成すること

図4 外国語科の目標

① 外国語活動における言語活動

小学校中学年に実施する外国語活動では、1単元4時間で構成されていることが多い。そのため1時間目にゴールとなる言語活動を示し、2、3時間目にゴールにつながる言語活動を行い、4時間目のゴールの活動となる。4年生の小学校外国語教材 Let's try 2 Unit 4 の日課を話題にした実践である。ここでは「友達のことをもっとよく知るために、一日の生活や好きな時間を伝え合おう」という単元を見通す言語活動を示した。その際、担任やALTの意外な一面を児童に伝えられるように工夫し、「みんなが知らなそうな自分」という設定を作り

図5 単元の流れ 令和3年6月28日実施 全4時間

Unit 4“What time is it?”.

単元目標 友達のことをよく知るために、好きな時間や自分の日課を相手に伝えるように尋ねたり答えたりして伝え合う。

時間	単元計画
1	時刻や日課の言い方に慣れ親しむと共に学習の見通しをもつ。
2	世界の国や地域によって時刻が異なることに気づくと共に、時刻や日課の言い方に慣れ親しむ
3	自分の日課について、尋ねたり答えたりして伝え合う。
4	相手に配慮しながら、自分の好きな時間について伝え合おうとする

みんなが知らなそうな自分」という設定を作り焦点化を図った。そして、2・3時間目では学年の先生の紹介も行い、その後、自分の事になるように学習をつなげていった。4時間目のゴールの活動では、みんなが知らなそうな自分の日課や好きな時間を発表した。1時間目にゴールを明確に示し、2、3時間目も学習がつながるように工夫したことで、学習が積み重なり、最後に自信をもって話す姿が見られた。言語活動を通して、本当の自分の考えや気持ちを伝え、コミュニケーションの良さや楽しさを味わっている姿が見られた。

もって話す姿が見られた。言語活動を通して、本当の自分の考えや気持ちを伝え、コミュニケーションの良さや楽しさを味わっている姿が見られた。

②中学校3年における言語活動

中学校3年では、Unit 6 の AI をテーマに自分の考えを伝え合う単元で検証を行った。単元の前半では教科書に載っている AI に関する記事と、それについての登場人物の意見を読み取りながら、「AI との付き合い方を考えるために、翻訳ソフトと外国語学習についての自分の考えを掲示板に投稿しよう」という単元を見通す言語活動を設定した。単元の中盤に、自分の考えを表現するにあたって必要となる既習事項を復習したり、必要な単語を学習したりしながら少しずつ自分の考えを積み上げていった。終盤には、中盤に学習したことを使用して自分の考えを書いて表現していった。生徒がゴール

を意識して学習していくことで、他者と意見の違いを意識して自分の意見をまとめていくことができ

た。

このように、小学4年でも、中学3年でも言語活動を中心とした授業展開を行い、言語活動の目的や場面、状況の設定を明確にしたり、工夫したりすることで、自分の考えや気持ち英語で伝え合う姿が見られた。英語の技能を習得するためには、言語活動を継続することが重要であり、小学校3年から中学校3年まで言語活動を繰り返し行うことで、コミュニケーションを図る資質・能力の育成につながるものと考えられる。

図6 学習の流れ 令和3年10月14日実施 全10時間9時間目
Unit 4 “AI Technology and Language”
単元目標 自分の考えを掲示板に投稿し、またクラスメイトの投稿を読んで意見を持つことができる。

	学習の内容
導入	・ Small Talk(意見の言い方を復習する。)
展開	・ テーマの英文を読み、自分の意見に近いものがどれか考える。 ・ 自分の意見とその理由を考え、クラス全体で共有するために、英語でまとめる。 ・ 英語で書いた自分の意見をクラスルームのストリームにあげる。
まとめ	・ クラスメイトが投稿した意見を読む。 ・ 次回、クラスメイトの意見を読んだ感想を話し合うことを確認する。

(4) CAN-DO リストの活用

図7 CAN-DO リストスタンダード

中学校・高等学校においては、言語を用いて何ができるかという観点から、生徒に求められる英語力を達成するための目標(学習到達目標)を記した「CAN-DO リスト」を設定することが求められている。川崎市では、市立中学校、市立高等学校全校において、CAN-DO リストを設定している。

本研究では、このCAN-DO リストに着目した。CAN-DO リストは、中学校・高等学校のみにおいて設定が求められているが、本研究会議では、各学校がCAN-DO リストを作成する際の基準となるように、小学校・中学校と連続したCAN-DO リストスタンダードを作成した。そうすることで、小学校・中学校、相互の校種での学習内容を意識することができ、そのスタンダードを参考に各校が指導計画を作成することで、小中学校において、カリキュラムの連携がしやすくなると考えた。

CAN-DO リストスタンダードでは、「聞くこと」「読むこと」

「話すこと(発表)」「話すこと(やり取り)」「書くこと」の5

領域で、学年が上がるごとに、単語数が増えていくよう設定している。また、小中連携を意識して、「話すこと(やり取り)」でも、「伝える」→「述べ合う」→「話題を展開し、会話を継続させる」というように、学年が上がるごとにやり取りがステップアップしていくよう設定した。どの領域に関しても、教科書で扱われる題材から能力記述文を作成し、小学校3年から中学校3年までの7年間で複数の話題を扱い、様々な題材を繰り返し扱いながら、定着が図れるようにした。各項目は、「～ができる」という能力記述文で示しているが、小学校3・4年は、教科としての外国語ではなく、外国語活動であり、できるようになることが求められていないため、能力記述文ではなく、「～にする」というような文にした。CAN-DO リストスタンダードは、小学校2校、中学校2校において、実際に活用し、導入した学校の教員から「英語教育全体の流れが見えてよかった」「自分の学校でCAN-DO リストを作成する時に小中のつながりが意識できた」「具体的な数値や段階的な目標が見えることで、スモールステップも作

りやすくなった」「教科書の言語材料と連動していて言語活動の設定がしやすくなった」などの肯定的な意見があった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では、実態調査により、小学校外国語教育に対する教員の意識を明らかにし、外国語教育における小中連携の具体的な手立てやポイントなどについて研究した。実態調査では、中学校において、小学校外国語教育に関して一定の理解が進んでいるものの、小学校で学んできたことを生かす授業はまだ十分に行えていないことが明らかになった。中学校1年の小中接続部分での授業については、小学校で学習した表現や言語活動を取り入れることで、小学校で学習した表現を復習しながら、生徒が活動に意欲的に取り組み、小学校で学習した **can** を使って、伝える内容を思考する様子が見られるなど、小学校での学びを生かして活動する姿が見られた。

また、小学校4年、小学校6年、中学校1年、中学校3年で実施した検証授業において、小中ともに共通して言語活動を中心に授業を構成することができ、言語活動が、小中連携の核となりうることが明らかになった。言語活動については、小学校教員からは「小学校で表現が限られていても、内容を思考するような言語活動が可能なが分かった」「目的を明確にすることで見通しをもち、主体的に学ぶ姿につながるかが分かった」、中学校教員からは「語彙や文法ではなく、言語活動を中心することで小中連携が図れるかが分かった」「小学校で行っている言語活動を発展させることで長いスパンでスパイラルな活動を計画的に行えると感じた。」など肯定的な意見が聞かれた。

また、CAN-DO リストスタンダードについては、導入した学校では、自校での CAN-DO リスト作成時に参考することで、小中連携を意識して作成を進め、カリキュラムの連携を進めることができた。

2 今後の課題

小学校での外国語が教科化され、小学校での学びをつなぎ、中学校に発展させていくためには、小中連携が欠かせない。本研究において、小中連携の手立てやポイントとなる点を示したが、言語材料をどのようにスパイラルに扱ったらよいか、場面や題材をどのように設定していくかなど具体的な進め方について引き続き研究を進めていく必要がある。また接続期の指導については、**can** 以外の言語活動についてどのように扱うかなどについても研究を深めていく必要がある。

また、CAN-DO リストについては、7年間のスタンダードを示すことで、小中連携を意識した指導計画の立案を促すことができたが、CAN-DO リストについては本来、各学校において整備を進めていくものである。今回示した CAN-DO リストスタンダードを参考に各学校の実態に応じて整備を促し、それを活用した計画の立案、授業の実施方法など具体的な手立てについても研究を進めていくことが重要である。

最後に、本研究を進めるにあたり、適切なお助言をいただいた先生方、研究をご支援いただいた研究員所属校の校長先生並びに教職員の皆様に心から感謝を申し上げます。